

乗車時間の長さが乗り心地評価に及ぼす影響

大野央人 鈴木綾子 斎藤綾乃

長時間乗車時の乗り心地評価を検討するため、車内快適性シミュレータを用いて5時間の仮想旅行実験を行った。被験者は113名の成人男女で、乗車中30分おきに乗り心地評価を行った。その結果、乗車時間の経過とともに乗り心地悪化を確認し、乗り心地悪化量と振動暴露指標（VDV）の間に相関がみられた。また、座席間距離の相違が乗り心地に影響するのは乗車時間が2時間半程度までであり、乗車時間が3時間を超えると座席のクッション特性が重要になることが明らかになった。さらに、乗車時間が長くなるにつれて「読書」や「睡眠」に対するニーズは低下し、反対に「体を動かしたい」、「車内を歩きたい」、「外気を吸いたい」などのニーズが増え（図）、身体が無拘束性や気分転換に対する要求が高まる傾向がみられた。

（鉄道総研報告，2009年9月号）

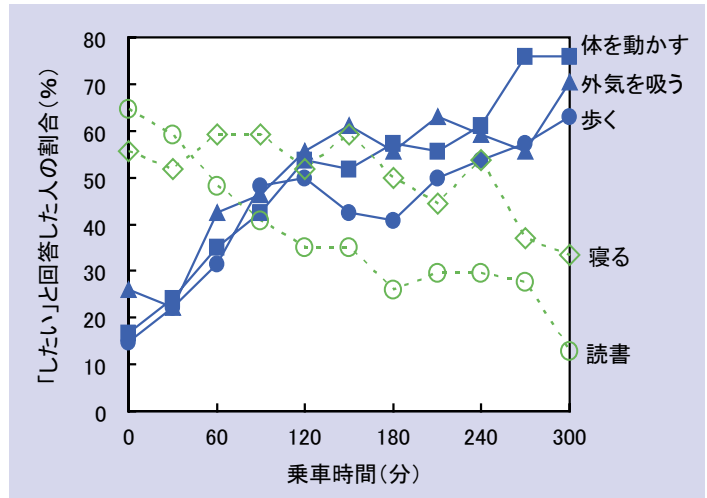


図 乗客が車内でしたいことの時間変化

大地震遭遇時を想定した鉄道利用者の行動調査

藤浪浩平 村越暁子

大地震後の駅の対応策を検討するためには、大地震によって生じ得る事象をイメージすることが必要である。そこで、地震に遭遇した人々と駅との間で生じ得る事象を把握するために、大地震遭遇時を想定した質問紙調査を実施した。今回の調査では、大地震遭遇後の鉄道利用者の行動の特徴として「行動の選択内容は発災時間帯や経過時間によって変動すること」や「トイレの開放や多様な情報の提供を駅に求めること」などが把握され、多様なシナリオにもとづいた対応策の立案が必要であると考えられた。また、事前の対応策として、鉄道会社が「大地震発生後の駅の対応などに関する情報」を日常的に発信することが考えられ、これについては、「駅に来る人の数を抑制する」という点で一定の効果が見込め

そうであること」や「鉄道利用者に概ね好意的に受け入れられそうであること」などが把握された。

（鉄道総研報告，2009年9月号）

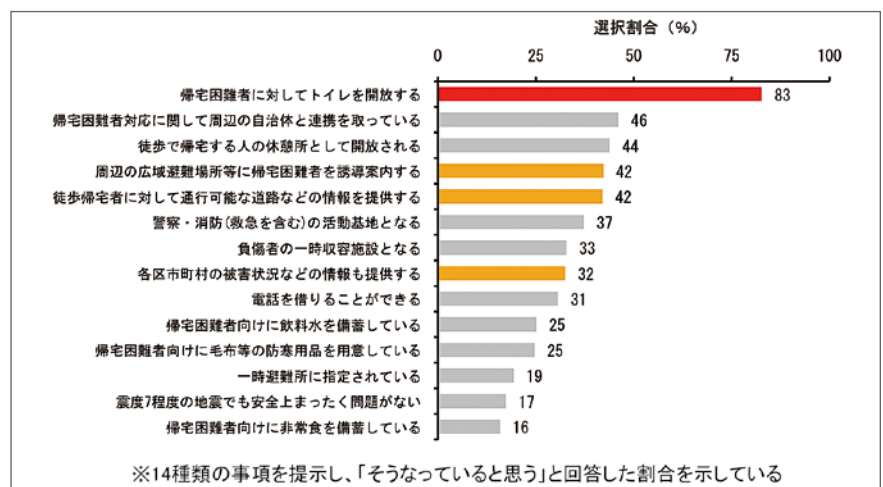


図 大地震に遭遇した人が駅に期待すること